

千葉常胤生誕900年 歴史文化フォーラム 議事録

テーマ「千葉氏と妙見祭礼」

■パネリスト

- ① 日暮 冬樹(佐倉市教育委員会文化課学芸員)
- ② 小川 智之(千葉氏顕彰会理事・千葉市議会議員)
- ③ 古庄 秀樹(小城市教育委員会文化課長)
- ④ 齋藤 武生(郡上市大和町文化財保護協会会長)
- ⑤ 二本松 文雄(南相馬市博物館学芸員)
- ⑥ 佐藤 育郎(いわて東山歴史文化振興会会長)
- ⑦ 二瓶 雅司(涌谷町教育委員会生涯学習課主事)

■コーディネーター

- ・濱名 徳順(千葉氏顕彰会副会長)

■平成30年5月27日(日)

■三井ガーデンホテル千葉

○司会 それでは、お時間になりましたので、ただいまから千葉常胤生誕900年歴史文化フォーラムを開会させていただきます。

このたびのフォーラムのテーマは「千葉氏と妙見祭礼」です。千葉氏の守護神は妙見菩薩ですが、現在でも全国の千葉氏の所領であったところでは、さまざまな妙見様の祭礼が行われております。本日は各地から有識者の皆様にお集まりいただきまして、それぞれの地域の妙見祭礼について直接御講演いただきます。

まず初めに、佐倉市教育委員会文化課、日暮冬樹様から「中世千葉氏の妙見祭礼」について御講演いただきます。日暮様、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○日暮冬樹(佐倉市教育委員会文化課学芸員) こんにちは、日暮と申します。本日は「中世千葉氏の妙見祭礼」ということでお話しさせていただきます。時間が短いものから、資料とか、今日いろいろ用意させていただきましたけれども、余り丁寧には読まないで簡単に飛ばしていくと思いますが、御容赦いただきたいと思います。

まず初めに、祭礼ということに関して考えておきたいと思います。私なんかは祭礼、お祭りといいますが、出店でおいしいものを食べたり、山車や神輿のきらびやかなものを見て楽しむと。どちらかというと、どうしても見物する側の人間で考えてしまいがちですが、実際にはもっと厳粛なものを含めて祭礼と申すということが言われております。ですから、個人的な神に対する祈り、感謝、これも祭礼の1つということになります。

ただ、信仰の組織的な儀式を祭礼として指す場合が一般的に多くなるということが言えるかと思えます。その場合、世間の一般的な年中行事や通過儀礼、もしくは宗教の信仰、何かの記念に対する儀式が組織立った儀礼につながっていくことが多いようです。それが次第にだんだん進化していくと、その儀式に娯楽性がついてくるという形になります。そうすると、その儀礼に参加する者、また、その娯楽性を見物する者が出てきまして、そういう祭礼、儀式がイベント化してくる部分も出てくる。最終的には祭礼と言いつつ、信仰とはちょっと別のお祭り、イベント化するところまでいくものということが言われております。

本日は中世の千葉氏の妙見信仰から出てきている祭礼について、史料を通じてお話ししていきたいと思っております。史料の制約がありますので、なかなか細かい話ができない部分もあるのですが、先学の研究も多いので、それを参考にしつつ進めていきたいと思っております。

妙見信仰は何かということを少し触れておきたいと思います。妙見信仰というのは北辰星、北極星、北の空で動かないでずっと同じ位置にいる星の尊格化が始まりと言われております。中央アジアの遊牧民、砂漠の目標のないところで生活する人々がその北極星を目印として生活する。その生活を通じてだんだん神格化し、その信仰が中国に伝来して、中国の道教、儒教、陰陽道、さらには仏教と組み合わせさせて妙見信仰、妙見菩薩となって日本に参ったのが妙見信仰と言われております。

房総で妙見信仰といいますと、千葉氏が信仰したものとして名高いものということが言えるかと思えます。今お話ししたとおり、もともとは大陸から日本にやってきた宗教、信仰なので、千葉氏の信仰にとどまるものではございません。もともと帰化人が大陸から持ってきましたので、関西のほうでも妙見信仰は少なからず信仰されており、そういう寺社も多くございます。

千葉氏のほかに、山口に大内氏という、南北朝から室町時代に守護として勢力を伸ばした武家がありますが、この大内氏の信仰が妙見信仰ということは著名なものになっております。

千葉氏が妙見信仰を始めた頃というのは、具体的にはよくわかりません。ただ、今、妙見の縁起として伝承されていることで、千葉氏の妙見信仰の始まりとして語られている有名な話がございます。群馬県群馬郡、上野国の染谷川で。平良文と平将門 - 平良文は、先ほど近藤先生のお話もありましたけれども、千葉の祖先に当たるような人物 - と、平国香が合戦しておりまして、そのときに平将門と良文側に妙見が加勢をして合戦に勝ったという伝承がございます。この戦いの結果、妙見の御加護によって千葉氏が妙見信仰を始めたと言われております。

妙見が千葉氏の味方をして戦いに勝ったという伝承は、それ以外にもございます。鎌倉時代のいわゆる源平の合戦期の異史として有名な『源平闘諍録』というものがございますけれども、こちらのほうでも、蚕飼川で平将門と平良兼の戦いがございます。このとき、平将門に妙見が御加護を加えて戦を有利に導いたとされています。

もう1つは、先ほどもありましたとおり、鎌倉時代、頼朝の挙兵に千葉常胤が加勢するのですが、その加勢をしたすきに、藤原氏が千葉に攻めてきて、それを守るのに、常胤の孫に当たります千葉成胤が戦い苦戦しますが、妙見の御加護によって戦いに勝ったと伝えられております。

『源平闘諍録』がつくられた鎌倉時代、当時千葉氏は、当主がみんな若い年齢で死んで

しまつて、その威勢を保つのに苦勞したという時期でございまして、このような妙見信仰につながる千葉氏を強調して、千葉氏の威勢を保とうとしたという説もございまして。そういうふうと言われるほど、千葉氏と妙見信仰は密接なものという認識がそのころあったということが言えるかと思ひます。画面のほうは「良兼」が「吉兼」になっていますけれども、これは良文と同じで「良」のほうの「良兼」です。済みません、訂正しておきます。

画面の『千葉妙見大縁起絵巻』は、染谷川の合戦の時に平将門と良文に加勢する妙見を描いた巻物の絵です。江戸時代に描かれたものですので、中世、その当時書かれたものではありませんが、このように童姿をした妙見が千葉氏を加護するという伝承が残されているわけです。ちなみにこの絵巻に描かれている妙見様は童姿で白い衣服をつけておりますけれども、よくある千葉に残されている妙見像というのは、亀に乗った戦闘服というか、当時の合戦に備えたような姿でつくられた立像が多いと言われております。妙見は、その姿も成立が複雑なところもありますので、なかなかお姿も一定した形では描かれなかったと考えられております。

千葉氏の妙見信仰を支えたのが金剛授寺というお寺になります。近世には妙見寺と呼ばれておりまして、明治時代には神仏分離によって、現在の千葉神社につながっていくお寺ということになります。金剛授寺は一条天皇の御勅願所と言われておりまして、長保2年、ちょうど1000年のときに大僧正覚算和尚によって建立されたと伝えられております。ちなみに覚算和尚が建立したときの千葉氏の当主というか、まだ千葉を名乗っていないんでしょうけれども、平忠常が活躍したころ、金剛授寺が建立されたと言い伝えられております。この寺をまとめる座主と呼ばれる人物がいたのですが、その座主には、千葉氏の当主の子供や、当主に近い人物が就任するということになっておりました。金剛授寺の中に尊光院、あと六院六坊と言われるような脇寺があるのですけれども、こちらのほうにも、千葉氏の一族に近い者がその当主となるが多かったと言われておりまして、千葉氏が支えていた寺院と言われております。金剛授寺は現在の千葉神社にもつながる寺院なので、当然、中世のころから妙見とは近い位置にあったと言われております。

ただ、最近の研究では、鎌倉時代には、中世ですから、寺院といつても、寺院と神社が一緒に混在しているようなところであったわけなんですが、金剛授寺の中で妙見より八幡神社のほうの方が有名であったのではないかという説もございまして、必ずしも中世一貫して妙見一色で回っていたお寺ではなさそうと、最近の研究では言われているところもあります。

こちらの画面では「金剛寿寺」で、「じゅ」が「寿」になっていますけれども、これは

「授」です。これからも「寿」になっているものが出てくるかと思いますが、頭の中で変えてごらんください。

画面の『千葉妙見大縁起絵巻』は、江戸時代の想像図なんですけれども、その伽藍を描いた図ということになります。多くの神社が境内の中に描かれております。ただ、皆さんのお持ちの資料のほうには、これと別の伽藍図が載ってまして、そちらのほうには六院六坊という脇寺を描いた図が載っております。ですから、そういうたくさんの脇寺や神社が集まって境内を埋めていたのが金剛授寺と言えらると思います。

染谷川の合戦で妙見の御加護を得て千葉氏が勝利を得た伝承ということを先ほどお話ししましたけれども、その合戦の勝利で千葉氏は妙見信仰に目覚めます。その妙見信仰に目覚めた千葉氏は、染谷川の近くに息災寺という寺院 - 上野国の妙見信仰を守っていた寺院 - の妙見が染谷川の合戦に、千葉氏に加護してくれたと聞きまして、その妙見様の1体を持ち出してしまふわけです。武蔵国や上総国、いろいろなところを転々としつつ、上野国から持ち出した妙見像を最終的に下総国に安置して信仰していくという形になります。

画面に見ていただいている図は、息災寺から千葉氏の家臣、常時文次郎 - 「栗飯原丈二郎」になっていますけれども、「丈」じゃなくて「文次郎」です——と、その娘が持ち出した妙見像のすすをはらって安置するところを描いた図と言われております。「栗飯原」となっています。縁起類には栗飯原とは出てこないようではありますが、千葉の金剛授寺の神主は、栗飯原氏が歴代になっていますので、栗飯原氏であろうと推定されております。それを描いた図を画面で見いただいています。

各地を転々として、ついに下総国に妙見様がもたらされます。ただ、一番初めに下総国に持ってきて妙見像をどこに置いたかといいますと、千葉寺です。そのころの千葉氏当主は常重だと言われておりますけれども、彼は初めに千葉寺に妙見像を安置しました。しかし、それから妙見像が盗まれるという事件もあったようで、千葉寺から自分の館の内側にその妙見像を移転していくという形になります。しばらくの間、妙見像というのは、千葉氏の当主の館に安置されて崇拝されていくという形になっていくと言われております。ですから、金剛授寺が妙見信仰の拠点というお話をしましたけれども、平安時代の末に妙見像が千葉にもたらされたときには、妙見像は金剛授寺にはどうもなかったということが最近の研究では言われ始めております。

それでは、金剛授寺にあった妙見的なものは何かというと、どうも惣代七社大明神、いわゆる神社があったように思われます。この大明神はどういう神社かといいますと、千葉

妙見に貢献した人々を祭る神社ということになります。その時に祭られているのが平良文、次に平将門、良文の子供である忠頼、平忠常といった千葉の祖先に関連するような人々を4人祭っているわけです。あと3人いるわけですが、その3人というのが妙見像を持ち出した常時文次郎とその娘2人。この7人を祭ったのが惣代七社大明神ということになります。この惣代七社大明神というのは、当時、「妙見大菩薩惣政所」と呼ばれています。ですから、金剛授寺の中では千葉の妙見信仰の中核にいた神社と考えられるわけです。

この神社に属する8人の大夫が白張烏帽子に上下を着して、4人の八乙女という巫女が高級な織物を使いました禪振と呼ばれる衣服を着用しまして、鈴と扇を持って、舞い踊って神前奉納したと言われております。そのような神前奉納する神楽と舞によって、国家と千葉氏一門の安泰を祈ったと言われております。

金剛授寺で当初行われていた妙見の信仰というのは、詳細なところはわからない部分もありますが、惣代七社大明神の社人たちを中心とした祈祷によって妙見のお祭りが行われたと考えられている。ちなみに、金剛授寺の神社関係者ではなく、寺院関係者も同じような祭りをしていたようなんですけれども、この社人と僧たちが鎌倉時代ぐらいには別々に祈願をしまして、妙見信仰の同じ行事、同じ祭礼をおこなうにしても、一緒のところではおこなわずに別々のところでおこなっていたと記録では残されております。

この惣代七社大明神は、本殿が3間、前殿が5間という結構大きな社殿を持っておりました。その社殿の右側に八乙女、左側に神主がいて御祈念を申し上げたと言われております。その正月朔日の惣代の御供物は千葉市の加曽利一貝塚で有名なところですよ、千葉市の寺山というところからもたらされておりました。

時間が来てしまったようなんですけれども、話が半分もいっていません。申しわけないです。ちょっと言いたかったところを申しておきます。次へ行ってください。これが惣代七社の社人が踊っている図です。

金剛授寺では神事が数多く行われておりまして、大別すると年中大行事。その中で大祭と言われる一次に小川先生がお話をなさると思いますよ今の千葉の夏祭りにつながるお祭りが行われています。

正月修正の祭礼という、お正月に主に寺院でおこなう祭礼というのも大きい行事でした。

また、元服という、千葉氏の子供が大人になる儀式も盛大に行われております。

戦国時代の初めに千葉氏に内乱が起こりまして、千葉氏の宗家は滅ぼされてしまい、千葉から佐倉のほうに千葉氏の本拠地が移るといことがおこると、千葉の館に置かれていた妙見像も移動しまして、金剛授寺に移されると言われております。惣代七社大明神のところで申しましたけれども、社人と供分——僧都ですね——は別々のところで御祈願をおこなっていたのですが、そのころから一緒のところで御祈願を行うという形になってくると言われております。

このように金剛授寺に妙見像が移ってくるのですけれども、妙見像を移した客殿が燃えてしまうような事件も起こります。その絵がこちらの画面になります。その後、客殿が燃えてしまうと仮殿をつくりまして、また新しく妙見宮を再建し、遷宮の儀式も大規模に行われます。

遷宮の儀式の中では、太刀や馬が金剛授寺にたくさん奉納されます。金剛授寺にいた人々の役職を見ますと、神馬を納める人がどうもいたように史料には見られます。ですから、金剛授寺の中で神馬を奉納する、飼育することがかなり行われていたということが言えるかと思えます。連歌師が書いた『東路のつと』という日記を読みますと、早馬の祭礼が千葉の妙見の祭りで行われていたということが言われておりまして、千葉の町ということもあわせて、金剛授寺と馬の奉納というか、馬の関係というのは、中世後期を特に中心にしまして、かなり強まるということが言えるかと思えます。

大分話をとぼしてしまいましたけれども、中世の千葉氏の妙見の信仰というのは、中世前期から後期にかけて一緒ということではなく、時代によって、かなり変わっているということが言えるかと思えます。それが、これから各先生方がお話になる現代の各地の妙見信仰の伝統を守りながら変革をしているお祭りであるという形でつながっていくのではないかな。

済みません、ちょっとバランスが悪いですがけれども、これで話を終わりにさせていただきます。(拍手)

○司会 日暮様、ありがとうございます。「中世千葉氏の妙見祭礼」ということで、歴史的な経緯等、全般についてお話いただきました。この後は各地の妙見祭礼について、それぞれの地域の皆様から御紹介いただきます。

まず初めに、千葉氏顕彰会理事・千葉市議会議員、小川智之様に御講演いただきます。小川様、どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

○小川智之（千葉氏顕彰会理事・千葉市議会議員） 皆さん、こんにちは。ただいま御紹

介にあずかりました千葉氏顕彰会理事の小川と申します。こんな格好をしていますけれども、なぜかといいますと、今回のテーマが「千葉氏と妙見祭礼」ということでございまして、パネリストに出てくださいというお願いが何で私のところに来たのかなというのはすごく疑問に思っていたんですが、もともと顕彰会のほうに誰か出してねということで役員の中に話があった。その中で、私、実は千葉神社の祭礼保存会のメンバーでございまして、妙見大祭に一番かかわっているから、おまえがやれやみたいな話になりまして、そんな安易なところから私が指名されたわけでございます。決して学術的に史学を研究している研究者でもなくて、単なるお祭り好きの一市民だという、そういった立場の中から今回千葉氏の行われている妙見大祭について少し御説明させていただこうかなと思っていますので、よろしくをお願いします。

先ほど日暮先生のほうから染谷川の合戦についてお話がありましたので、なぜ千葉の神社に妙見信仰が来たかという話は割愛させていただいて、こういった形で千葉に御本尊が移されて、千葉県各地に御分霊が行きまして、今では千葉県内で200から300あり、全国にも千葉氏の末裔の方々が広げていただいたということで、全国に妙見信仰が広がっております。

ちなみに私が住んでいるところが加曽利町というところで、先ほど加曽利の方から御奉納がありましたということで、加曽利というところも千葉氏との関係が非常に強い地域でもありますし、私が通っていた桜木小学校の近くには妙見宮というのがございます。この妙見宮は、桜木というところは開拓地だったので、当時の開拓の地元の代表者の方が、やっぱり神社がないと困りますということで、わざわざ御分霊されて最近つくられた。多分、一番直近でつくられた妙見宮じゃないかなと思います。

亥鼻城に移転してきたという話も、多分、ここにいらっしゃる方々は私が説明するまでもないので、時間が余らないので飛ばします。

先ほど話がございましたとおり、金剛授寺に移転と同時に大椎城から亥鼻山に来たときに、金剛授寺にそのまま御本霊を移転します。このとき、香取社というのがこの地域の神様だったんですけれども、金剛授寺があつて、そこに妙見信仰が来たということは大きなポイントでございまして、ここはちょっと押さえておいていただきたいんですけれども、こういったところから始まりまして、遷座して、このような形で今金剛授寺のところに妙見様がいらっしゃるということです。

お祭りそのものは大治元年（1126年）に千葉のほうに移動してきたときに、千葉が開府

されて、その翌年から妙見大祭が始まっていますので、ことしが892回目になります。8月22日が最終日、宮入りの日になるんですけれども、これは妙見様の御縁日が22日ということで、それから数えて7日間かけてお祭りをやるということで、16日が初日になるということです。ちなみに千葉の親子三代夏祭りというのが千葉で行われていますけれども、こちらのほうは8月16日から22日の間の土日を当て込んでお祭りにしているというのが始まりになっています。

日暮先生のお話がありましたけれども、もともと祭礼というのはどちらかというと権威づけという部分が非常に強かったようでありまして、これは『妙見大縁起絵巻』の中に入っていますけれども、亥鼻山から千葉神社といいますか、金剛授寺が離れているものから、年に1回は御本霊様を鳳輦という小さい神輿に乗せて地域を回っていくのが昔のお祭りだったようであります。

時代がたつとともに、皆さん御案内のとおり、千葉氏は残念ながら、会長がいる前で大変申しわけないんですけれども、途中で亡くなってしましまして、当然ながら、祭祀をしている千葉氏がいなくても、恐らく住民の文化として定着はしてきたのかなというところで、こういった鳳輦から、町民の文化である江戸神輿の影響を受けた神輿に現在はなっています。先ほどあったとおり、明治より神仏習合によりまして、金剛授寺から千葉神社という形になりましたので、神社様式のお祭りというのが明治時代から現代に伝わっております。

これから現代の祭りの特徴なんですけれども、千葉の担ぎ方、もみ方というのがちょっと独特でありまして、普通に肩で担いではいるんですけれども、もみ方というのが地面すれすれまでおろして、合図とともに、「やれ、やれ、やー」のかけ声でおろして一気に持ち上げます。このときはずっと差したまま。これが差しという、千葉の独特のもみ方でありまして、実は宮出しのときに、院内の中では担いではいけないので、もんで差す、もんで差すを繰り返しているのが非常に体力が要ります。私も祭りのときは気合いを入れていかないと、ずっと最初から担いでやってしまうと体力がもたないので、最後だけ全力を出そうといつもやっています。

先ほど香取社の話があったんですけれども、実はお寺に対する敬意というか、香取社に対する敬意というのがありまして、神輿に鳳凰がついているんですが、宮出しをするときは鳳凰はついていません。しかも、神社の鳥居を通らずに、まず香取社に挨拶に行きます。そこで初めて挨拶が終わって、奉幣の行事をやってから、ようやく鳳凰を頭にくつつ

けて本格的に神輿が開始されるというのが千葉のならわし、ルールですので、その前に香取社の鳥居もくぐってはなりませんという、つまり遠慮があるということ。これはずっと続けられている伝統です。これが特徴の1つになっています。

担ぎ手も大分変わっておりまして、当時は和田両家、大塚家、小川家。私、この小川家でありたいなと思ったんですけれども、実は全然関係ない小川家なんですけれども、院内の氏子さんで、この4家しか担げなかったんです。それからだんだん院内全体の氏子が担ぐようになってきました。

江戸末期ぐらいから、社殿内だけは院内の方々が担ぎましょうと。境内のときは、宮司様に聞いてもちょっとわからないと言っているんですけれども、16日と22日、交代で貝塚村の人たちと辺田村の人たちが担いでいたという文献が残っていたそうです。

明治中期になりまして、院内の方々が年に交代して担ぐ人をかえるという年番制をやりまして、戦後は社殿内、院内の方なんですけれども、結局、院内の中も担ぎ手が減ってしまって、私みたいなよそ者が祭礼保存会という形で担げるようになっている。境内内は全町会で担いでいくという方式に変わっています。

前日の8月15日に潮垢離の神事を行います。残念ながら、昔は妙見洲というところで、こういった形で古い鳥居があったんです。でも、今、残念ながら埋め立てられてしまっていて、ただ、今でも網元の海保さんの家でみんな裸になって着がえて、この神事を端っここのほうでやっております。ですから、ちょっと異常なんですけれども、妙見洲があった鳥居になった埋立地で、これを思いっきり路上でやっているの、端から見ると単なる変態です。いつもラーメン屋の前を通るんですけれども、ラーメン屋のお客さんはぎょっとした顔してこの姿を見えています。おもしろいので、ぜひ8月15日も見に来てください。

これはワクイさんが持っていた古い写真。これが社殿で宮出しを行いましたよという写真だとか、22日の昇殿勇めとって、先ほど言ったように、納めるとき、お祭りが終わる前にみんなで最後のもみ、ずっと境内の中でやる昇殿勇めというのをやっているんですけれども、この昇殿勇めに入れるのも、今では祭礼保存会という、召立之儀とって、わざわざ宮司さんに呼んでいただいて、緑色の鉢巻きをした人間しか入れない。限られた人間だけがやれるので、今、祭礼保存会はメンバーを募集しているので、どうしてもやりたいという人がいたら、よかったら祭礼保存会へ入っていただければと思います。

山車も大分変わってきてまして、これは『妙見大縁起絵巻』に載っていますけれども、昔はどういうわけだか、いわゆる千葉舟、結城舟という山車もあったようです。です

から、歴史とともに、こういった形だか、上の方が神武天皇なのかどうかもわからないんですけれども、こういった形の山車で、途中にはわけのわからない祭りになっていたようです。

今やっているお祭りでは、1つは、下にあります御鉾旗車という、おほこ旗祈願というのが、初日に子供の安全祈願じゃなくて、子供の名前がこうやって書いてある全部祈願されたものをこれに乗っけて、神輿の前を山車が引かれております。その後におはやしがあって神輿という順番で、その先導は天狗様といいますか、猿田彦がしていると。だから、今は本当に妙見様と何のかかわりもない状態になってしまっているというのが実情じゃないかなと思っています。

最後になりますけれども、別名千葉だらだら祭りと言われていています。みんな勘違いしているんですけれども、16日から22日まで時間をかけて、しかも、とろとろ町なかを歩いているので、だらだらやっているからだらだら祭りじゃないかと言うんですけれども、それを言うと宮司様は怒りますので、皆さん、これだけは覚えておいてください。これは大太鼓車というのがおはやしと一緒に引かれています。ドーンドンという音が後ろから前から鳴るので、そのときの二段打ちの独特の音がだらんだんと鳴るからだらだら祭りになったという説を一番とっていますので、だらだらやっているわけじゃなくて一生懸命担いでいるので、ひとつよろしく願いいたします。

以上で私からの発表とさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 小川様、ありがとうございました。

続きまして、佐賀県小城市教育委員会文化課長、古庄秀樹様から御講演いただきます。古庄様、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○古庄秀樹(小城市教育委員会文化課長) 皆様、こんにちは。ただいま御紹介いただきました、佐賀県の小城市からやってまいりました古庄と申します。どうぞよろしく願いいたします。

佐賀県は皆さん御存じですよね。九州鎮西にございます。肥前千葉氏が治めた地が小城の地でございます。きょうは「肥前千葉氏の信仰」という形で、妙見に限らず、肥前千葉氏がもたらした信仰について御紹介したいと思っております。先ほど中世の妙見信仰などはごちゃごちゃではないかというお話があったようですが、確かにそういう状態であったようです。1つの信仰に限らず、幾つか習合して、その習合した形を千葉氏は信仰していたようでございます。私はレジュメ、A4裏表2枚ですね。あっさりした資料でございま

すけれども、それと、このパンフレットについて御紹介したいと思っております。

このパンフレットの10ページをごらんください。小城市の概要をちょっと触れております。小城といえば羊羹で有名でございますけれども、そのほかにムツゴロウとかシオマネキが有名でございます。千葉氏は羊羹を食べておりませんでしたけれども、ムツゴロウとかシオマネキは食べていたかもしれません。それだけは特産品でございます。

それと「千葉氏や妙見とのつながり」ということで、ここにも若干触れております。小城市は肥前千葉氏の拠点となったところでございます。皆様御存じのように、肥前千葉氏は、先ほどお話がありました千葉常胤が、源頼朝が鎌倉幕府を創設するときに功績がありまして、頼朝から小城郡の晴気荘の地頭を賜り、そこから小城と千葉氏につながりが始まっております。その後は代々、代官を派遣して小城を支配しておりましたけれども、モンゴル襲来のときに千葉の当主が小城に下向して参ります。頼胤、宗胤、胤貞となりますけれども、頼胤はモンゴル襲来の傷がもとで小城で亡くなってしまいます。頼朝の死後、宗胤がやってきますが、その後の胤貞、胤泰と続き肥前の中枢部を治めていきまして、最後には戦国大名級の勢力を確保していくようになります。これを下総の千葉氏と分けまして、肥前千葉氏ということで位置づけられております。

肥前千葉氏の信仰ということですが、まず、千葉氏が小城にもたらした信仰として一番最初、妙見信仰でございます。妙見信仰が一番早く見える古文書でございますけれども、千葉胤貞置文案という古文書がございます。これは小城にございます日蓮宗寺院の光勝寺に伝わっておるものでございまして、置文というのは、胤貞が子孫に残して書いた戒めみたいなものですが、私の言うことを聞かないと妙見の罰が当たるぞと書いてあります。一番最初の小城で見える妙見信仰についての古文書は正中元年（1324年）のものでございます。

胤貞の子供の千葉胤泰、この方は先ほど言いましたように、肥前で在地領主化して行って、小城から佐賀郡という、肥前の中枢部に勢力を拡大していく方ですが、この方の千葉胤泰請文という古文書がございまして、これは福岡県の宗像神社に残っている古文書なんですけれども、その中にも妙見菩薩の罰が当たるということが書いてあります。妙見菩薩は千葉氏にとって、罰を与えるような怖い存在であったということがわかります。千葉氏一族の紐帯と申しますか、そういうものを強める信仰であったのではないかと考えております。

神社としましては、北浦妙見社、西晴気妙見社がありまして、神社のほうにお願いし

て、パンフレットの10ページに北浦妙見社の妙見菩薩の写真を掲載させていただいております。こういう全国的な規模で写真を紹介するのは初めてではないかと考えております。北浦妙見社の妙見菩薩立像ということで、剣を振りかぶっている写真を掲載しております。九曜紋が飾られております。御参考にしてください。

それと、千葉氏が小城にもたらした信仰の中でもう1つ大きいのが日蓮宗。小城には2つの勝妙寺と光勝寺という、日蓮宗の大きな寺院がございますが、この勝妙寺には日蓮曼荼羅本尊、それと中山法華経寺歴代貫首の曼荼羅というものが残されております。日蓮曼荼羅本尊は、右のほうにお写真を掲載しております。日蓮直筆の曼荼羅は全国で約130点ほどしか残ってないんですが、小城にはその1点が残されております。これは千葉胤泰が鎮西下向に伴って、自分の守り神じゃないですけども、そういうものとして持ってきたものです。これが小城の勝妙寺に伝わっております。勝妙寺、光勝寺といいますのは、千葉県市川の中山法華経寺のつながりが深い寺院でございます、勝妙寺には中山法華経寺の歴代貫首の曼荼羅本尊が17幅残っておりまして、ことしの春に市の重要文化財に指定しております。

あと光勝寺ですけども、これは鎮西本山とも呼ばれておりまして、鎮西に日蓮宗を普及するためにつくられた寺院でございます。この光勝寺につきましても、境内の中に日蓮宗と妙見のつながりが確認できるということです。その中に古文書が残されておりまして、光勝寺については、千葉胤貞譲状というのが法華経寺の文書にございまして、その中に、光勝寺職とか妙見座主を譲り与えたという古文書が残っております。日蓮宗の中に妙見信仰がうかがえるという史料でございます。

それと禅宗といたしまして、円通寺、三岳寺という大きな寺院が小城には残っております。円通寺は、鎌倉の建長寺、京都の南禅寺に並ぶ三大興国禅寺と呼ばれております。南宋の蘭溪道隆が博多に来たときに、円通寺の僧侶であった若訥宏弁という方が博多に赴きまして、蘭溪道隆の弟子になっております。そのゆかりで円通寺を禅宗として変えた。この円通寺につきましては、千葉宗胤が大旦那となって大きく改造し、建長寺に模して伽藍を整備したと言われておるようです。そのほか、三岳寺というお寺もございます。

4番目ですけども、千葉氏が肥前にもたらした信仰としまして須賀神社。祇園信仰ですね。千葉胤貞公が小城に下向するとき、京都の八坂神社の御霊を分霊して祇園社としてお祭りしたのが須賀神社の始まりだと言われております。2年前に700年祭を迎えております。700年の歴史がある古い神社でございます。ただ、西川須賀雄という、明治に活

躍した国学者ですけれども、この方の説によりますと、もともと延暦22年にあった清雄社という神社を千葉氏が再興して祇園さんという神様を祭って祇園社としたという伝承も残っております。

それと、祇園信仰と日蓮宗とのつながりでございますけれども、光勝寺の僧が須賀神社の座主を務めていたと。そのほか、妙見信仰とのかかわりでは、光勝寺は現在、妙見之宝剣というものが伝わっておりまして、これは北斗七星を刻んだ剣なんですけれども、もともと須賀神社に御神体として祭られていたものが明治になって光勝寺に移されたという記録が箱書きに書いてあります。このように、祇園信仰にも日蓮宗、あるいは妙見信仰との密接なつながりが確認できるということがわかります。

須賀神社の祭礼として一番有名なのが、右上に写真を載せております山挽祇園。これも千葉胤貞公が始めた夏祭りだと言われております。ことしで702年を迎えます。7月22日の日曜日にこの祭礼が行われまして、千葉のほうからでも見学に来ていただけるようでございます。この山挽祇園についてですけれども、これも千葉胤貞が軍陣の稽古として始めたそうです。胤貞が山の上に乗って笛を吹いて、兵隊の指揮をしたというのがこのお祭りの始まりだと言われております。

山挽祇園でございますけれども、一旦、千葉から鍋島の時代になりますと、鍋島の家臣が取りやめたらどうかという話を鍋島の殿様にしますが、存続しなさいという一言で現代につながっております。一時期、江戸時代の終わりに倭約令で山挽は中止になるんですけれども、明治になって、小城の町民によって再興され、現在につながっているようです。

ざっと御紹介しましたけれども、肥前千葉氏の信仰のあり方として、最後にまとめておりますけれども、多様で複雑であると。小城の祇園・牛頭天王信仰は千葉氏の精神生活を支えた法華信仰と妙見信仰が深く結びついてたとまとめることができるのではないかと。千葉氏の信仰のあり方としては、こういう考え方ができるのではないかと考えます。

その当時の中世に生きた鍋冠日親という日蓮宗の僧侶なんですけれども、この日親も千葉氏の信仰のあり方について批判している記述があります。千葉氏の信仰は一貫性がなくて、いろんなものを信仰している、それはいけないんじゃないかと、日親は千葉氏の信仰態度を批判しております。私は千葉氏も、戦国の世を生き抜く上で何か精神的支柱を持たざるを得なかったのではないかと考えております。それはいろんな宗教を信仰し、心の寄りどころとしていったのではないかと考えております。

現在の妙見信仰でございますけれども、これはパンフレットの12ページに簡単にまとめ

ておりますけれども、小城市には、さっきお話しした北浦妙見社と西晴気妙見社というのがございまして、北浦妙見社は10月のお祭り、西晴気の妙見社は8月にそれぞれお祭りが行われます。おくんち、ひつけという名前をつけております。先ほどお話があった千葉神社の祭礼のような大規模なものではございませんけれども、現在は地区の人たちによって守り伝えられ、こういう形で存続しているということで報告させていただきたいと思っております。

以上でございます。(拍手)

○司会 古庄様、ありがとうございました。

続きまして、岐阜県郡上市文化財保護協会理事、齋藤武生様から御講演いただきます。齋藤様、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○齋藤武生(郡上市大和町文化財保護協会会長) ただいま御紹介にあずかりました齋藤でございます。きょう、時間が20分という持ち時間でございますので、初めに、千葉氏が郡上の大和のほうへ入部したことを簡単に、その後、明建神社のことと、きょうのテーマで祭りということでございますので、毎年行っております七日祭のことについてお話ししたいと思います。

まず初めに、私たちの位置は岐阜県の真ん中にございまして、かの有名な長良川沿いにございます。

そこで、初め、千葉氏が、現在車で来ますと600キロ、当時ですと1,000キロぐらいあると思いますが、東庄町から郡上へ入部してきました。初めは阿千葉城というところにお城を構えました。3代、90年、ここにおりまして、越前の朝倉氏による攻撃のこととか、あるいはお城が狭いなどにございまして、篠脇城という山へ移ってお城を築きました。このお城は臼の目堀と申しまして、お城の脇に堀をつくっております。これは約30本の堅堀でございます。天文9年(1540年)の朝倉が攻めてきたときに、ここから石を落として退治したと言われております。ちょっと珍しいお城の作り方をいたしております。それから、そのふもとのところには、国の指定名勝になっておりますが、東氏の庭園の跡がございます。こういうところが妙見でございます。

入部当時、郡上には、平安時代のときには皇女——天皇の奥方とか娘さんたちの荘園がございました。千葉県の東庄は京都とのつながりもございます。また、郡上の北には、平安時代のときに大きな鳥が地元住民を苦しめていた。勅命によって、ある若者が、その鳥を退治した。その功績により、「鷲見」という名字になっておるのですが、その鷲見一族

が郡上の北部を支配してきた。今度、鎌倉の時代になって、平安の気のかかったのがおるなということで、ちょっと抑えなさいということでしょうかね。

また、先ほど申しましたように、京都のつながりがあるということから、あるいは長良川を境にして、東と西を分ける重要な地点であった。また、京都に近いということから、郡上のこの地が東氏に加領されたんじゃないだろうかと私は考えております。

そこで、入部のことにつきましてはこれほどにいたしまして、明建神社についてお話しします。1221年、今から約797年ほど前でございますが、千葉のほうからここへ、先ほど来、御説明のございました妙見菩薩を勧請してきました。大坪家の古文書の中にこのように書いてございます。供侍というんですかね。6名を頭にして、そして6名の村人をつけて、妙見菩薩を勧請してきたと。そして、先ほど御説明がありました粟飯原文次郎常貞という神主も一緒に来ております。その下働きといたしまして、土松彦太郎、そして当家の家老で、また、神社の関係の奉行をいたしておりました埴生太郎左衛門というのも一緒に来ております。この者たちによって妙見菩薩が運ばれてきて、阿千葉城ができるまで、内ヶ谷という部落があるんですが、そこに約半年ぐらいおりまして、阿千葉城の近くに妙見菩薩を祭って約90年。それから、先ほど申しました、現在の篠脇城跡の近くにありますが明建神社というところにこの菩薩を祭ったということでございます。

しかし、当時、郡上には、西暦717年から白山信仰がずっと支配しておりました。また、諏訪神社の関係のお宮も718年ごろにありました。そしてまた、七大天神という神様の関係もできておりました。そういう中であって、東氏が妙見菩薩を勧請するというのは大変なことじゃなかったかなと思いつつ、さすが殿様だなと、感じがしております。古文書などから、1221年に守り神として同じように来たのが考えられます。明建神社とは、こういう神社でございます。

祭りのことについてお話しさせていただきます。この祭りは七日祭と申しまして、まず、拝殿の中での神事がございます。どのような神事を行っておるかとお申しますと、五穀のものを捧げる。それから、神事がございまして、あと祝詞をあげて、それから渡御が行われて野祭り、こういう順番で祭りが実施されていきます。

この祭りは、役者が全部世襲制なんです。代々ずっと、神輿を担ぐ人は担ぐ人、天狗をやる人は天狗、太鼓をたたく人は太鼓、笛を吹く人は笛を吹くと、前からそれが続いております。古文書等はございませんが、古いと申しまして、325年前、元禄6年（1693年）のことでございますが、そのときに奉行所へ届けた書類がございます。祭礼執行之儀

式という下書きがございまして、それによりますと、そのときの祭りの形態と今とっておる祭りの形態と少しも変わらなく、何百年も同じようなことが続いているという、本当に神事そのものでございます。

今、神輿とかいいますと、皆さん、わっしょい、わっしょいと担いでのお祭りの神輿なのですけれども、この祭りは、そういうことは一切ございません。昔から同じ家の人たちが同じようにやっている、こういう祭りでございます。

では、どんな渡御が行われているかと申しますと、皆さん御存じのとおり、神様とか天皇などがその地域を回られたりすることを渡御と申しますが、これも先導される人、それから先導露払いですね。その後に宮司が続き、その後に禰宜、祝、そして献幣使、弓取、神輿、拍子の音頭、杵振り、笛吹、太鼓、鼻高と申しております猿田彦、獅子、それから獅子をはやす子供たち8人、総勢30名。先ほど申しました元禄6年（1693年）のときの奉行に挙げたそのとおりのことが、今も同じようにされております。

拝殿を出てから約50メートルぐらいありますかね。縦大門と言いますが、そこを通り、その後、横大門と言っておりますが、桜並木、昔の馬場の後らしいですが、約230メートルございますが、そこを往復します。最後に往復するときの回るところで獅子が子供達を追いかけ大きく荒びて、子供たちの持つ笹を食うということもございます。そういう渡御をやります。

神輿を担ぐのは、ある部落の人たちなしに担げないのです。ほかの人たちは一切手出しができないのです。というのは、私が考えますに、千葉のほうから妙見新宮をこちらへお連れするときに、先ほど申しました頭6名と村人6名の人たちが、自分たちの大事な大事な氏神だから、ほかの者にはさわらすわけにはいかん、こういう厳しいことがあったんじゃないだろうか。よく長良川を渡るのに、その部落の人たちじゃないと渡れないんだということを申しますけれども、そういう大事な大事な神様を私たちが千葉のほうから大事に運んできた。そういうのを地元の者たちにさわらせるわけにはいかないと、そういう強い気持ちがあったんじゃないだろうか。ほかの者たちは、この神輿を担ぐわけにはいかないのです。この神輿は4名で担ぐのです。大変重うございます。非常に傷みも激しくなりました。3年前に約400万円かけて修復いたしました。こういう、いわれのある神輿でございます。

神輿を担ぐ人たちが、野祭りといって、野の広場のところで踊りをするのです。この人たちの衣装は結城たすきというのを首にかけます。——結城というのもたすきと同じこと

なのですけれども、結城たすき、私たちはそう言うておりますが、首にかけて、そして舞を踊ります。神事ですので、大体3回ずつ、この舞を行っております。この人たちも代々同じように神輿を担ぐ部落の人たちであります。

それから、杵振りと申しまして、ここのところに赤いのがあります。これは杵なんです。ウサギが餅つく横に絵が描いてありますが、あれと同じようなものを手に持っております。餅つく仕草などをして、最後に、これは高く上へ放り投げて受け取る。高く上がれば上がるほど非常に豊作だとか縁起がいいのだということです。こういうのを野祭りとして行います。

それから、これは獅子起こし。子供たちの笹が食べたいけれども、食べられないということで、この場所へ来て眠ってしまうのです。そして、先ほどの猿田彦の面をかぶった鼻高が、この獅子をおもしろおかしく起こすわけです。鼻に扇子などを突っ込んで、口を無理にあけさせながら起こす。この行為は、私はなぜだろうと思っておりました。いろいろ調べた結果、香取市のところに妙見神社というお宮がありまして、そこの祭礼に寝た獅子をおかめとかひょっとこなどがおもしろおかしく起こす、そういうことがあるらしいです。それが獅子起こしの原点じゃないだろうかと私は思っております。

お祭りの言い伝えの中に、2匹の獅子。赤い獅子と黒い獅子あり。この黒い獅子が、東の殿様が郡上のほうへ連れて行ってしまった。約300人のお供とかを連れて行ってしまって、本当に余りできないものばかり残っちゃって、郡上のほうへはみんな優秀な者が行ってしまった。まして若いべっぴんさんなどはみんな連れて行っちゃったと、こういうことを言われております。それがこの祭りの原点じゃないかなと考えるときもございます。このようにして野祭りが行われまして、最後は獅子が起きて笹を食べて帰っていく。七日祭りというのは、これで終了するのです。

この祭りそのものは厳粛な中に神様そのものを祭るという、本当に思いの祭りが実施されている。今、皆さんからお話がございます、いろんな面で祭りが変わってきておるということをお聞きしましたが、毎年8月7日に行われるこの祭りは今も昔も変わらない、素朴な、1つの田楽的な意味を十分に持ったお祭りだと言うことができるのです。

そして最たるところは、出る者たちは、1週間は肉などが食べれないのです。夫婦は床も一緒にはできないのです。当日は近くを流れている栗栖川で身を清めて、演ず出るので。本当に厳粛なる七日祭り、毎年8月7日。東庄町の方たちは毎年来ていただきます。これが、明建神社と祭りということでございます。

最後にコマーシャルを申し上げます。夜は薪能などもこの神社で行っております。そして、20年とか10年に一遍ずつ、掛け踊というのも実施するのです。この掛け踊は、総勢120人ぐらいで祭るんですが、この祭る中にも殿様役、お姫様役があるのです。その殿様を武士の格好をした、徒武と申している者が、4名がつく、お姫様にもつく。昔の殿様を大事にするのだということもこの祭りの中で出ております。

非常に長い撓いを背負って、拝殿の前のところで太鼓をたたいて踊るのです。最後には、この者たちが掃除をして、この祭りが終わるといふ、掛け踊という祭りも行っております。

それから、世界農業遺産にもなりました長良川。

そして、古今伝授の里といつて、先ほど歌等もございましたが、お宮さんの近くに古今伝授の関係の史料館。

それから、白鳥のほうへ行きますと、白山信仰の長滝白山神社、あるいは八幡城、そして徹夜おどりをやっております郡上おどり。この踊りも、東京の青山には郡上青山藩の江戸屋敷がありまして、毎年、東京の青山でも盆踊りをしております。

時間も参りましたので以上でございますが、1つ、8月7日、この古式豊かなお祭りを一度目にさせていただければ幸いかなと、このように思っております。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 齋藤様、ありがとうございました。

それでは、ここで13分ほどの休憩に入らせていただきます。次は16時から再開いたしますので、それまでに御着席をお願いいたします。

(休憩)

○司会 お時間になりましたので、フォーラムを再開させていただきます。

これから南相馬市博物館学芸員、二本松文雄様から御講演をいただきます。

それでは二本松様、よろしく願いいたします。

○二本松文雄(南相馬市博物館学芸員) こんにちは。福島県の南相馬市から参りました二本松と申します。きょうは千葉一族の相馬氏と妙見信仰について、まずお話をしたいと思ひます。その後、残った時間で相馬地方の代表的なお祭りであり相馬野馬追について、スライドを見ながら紹介したいと思ひます。

まず、東北の代表的な夏祭りの相馬野馬追ですけれども、国指定の重要無形民俗文化財になっています。震災後には、毎年7月の最終土、日、月の3日間開催されています。そ

の範囲がすごく広いんですけれども、江戸時代の中村藩領内、北は相馬市、南相馬市、双葉郡の大熊町までという、福島県浜通りの北半分の大変広い範囲から騎馬武者が集まって、南相馬市の原町地区で甲冑競馬とか神旗争奪戦という勇壮な行事を行いまして、3日目、最終日には、小高区にあります小高神社で野馬懸という神事を行います。特にこの野間懸という行事は生馬を奉納するという、神社に絵馬を奉納する習俗の古い形を残しているということで、文化財として非常に価値があると言われていています。

相馬氏の妙見信仰なんですけれども、千葉氏が妙見を弓箭神、弓矢の神様とすると、その分家であった相馬家も同じように妙見を信仰しました。奥州相馬氏も同じように信仰しました。奥州相馬氏が元亨年間、江戸時代の記録なんかですと元亨3年と言われていません。近年の古文書の研究者からは元亨元年という説もありますけれども、いずれにしても、1320年代、鎌倉時代の終わりごろに下総から奥州の行方郡、今の南相馬市に相馬氏が下向してきました。そのときに妙見と塩釜、鷲宮という三社を行方郡に勧請したんです。

相馬氏は、中世には、最初に太田に館を構えたと言われていています。その後、中世を通じてほとんど小高城にいたわけですね。一時、6年ぐらいは原町区の牛越に城を移したこともありましたが、また小高に戻っています。江戸時代になってから中村に城を移したのですが、その間、お城に相馬氏の氏神である妙見をお祀りしていました。本丸の乾の方向、北西側に妙見を祭ったといったのが中村城の妙見です。今の相馬中村神社がある場所ですけれども、妙見というのは、もともとは北極星、北斗七星を神格化・尊厳化した神仏で、古墳時代にはキトラ古墳とか高松塚古墳でも、玄武が北側の壁に描かれて北を守る神獣として信仰されていますけれども、このお城も、北のほうに妙見を祀ってお城を守っていたということを相馬氏も考えていたようです。

中世の相馬氏の妙見の信仰としましては、ほかに天正18年（1590年）に飯樋の合戦というのがありまして、相馬義胤と伊達政宗の軍勢が今の飯舘村の二枚橋というところ、飯舘村と川俣町の境の峠になるんですが、そこで合戦して伊達勢を追いやって、添箭（弓矢）を納めて神の標、妙見の標としたんですが、このように妙見は戦国時代には弓箭神、武神、境を守護する神として考えられていました。

野馬追ですけれども、奥州相馬氏の野馬追の記録として一番古いものでは、文献でさかのぼれるものは、『相馬藩政紀』といます相馬家の年譜がありまして、そこに慶長2年（1597年）に相馬義胤が小高城から牛越城に移ったときの記録がありまして、既に例年牛越城下（南相馬市原町区牛越）で野馬追をしていたという記録が最初です。

また、慶長7年（1602年）には、相馬義胤が牛越原で野馬追を、さらに刈谷沢（南相馬市原町区西町3丁目）、今、原町高校があるんですが、その近くで野馬懸をしたという記録があります。そこには、今もその馬を囲った土塁と言われているところがあります。

江戸時代の野馬追は藩主相馬氏と中村藩の行事として、旧暦の5月中の申の日に野馬を追ったんです。今の南相馬市の原町地区をすっぽり包むような広大な野原の周りをお堀を掘って土手を築いて、その中に馬を放し飼いにしていたんですけれども、その馬を追いつけたのが文字どおり野馬追なんです。そして最終日には、小高神社の境内で馬を放し飼いにして、神が選んだ馬を神馬と捕らえて小高妙見の神前に奉納した。それが江戸時代の野馬追です。江戸時代の野馬追は、奥州相馬氏の氏神である妙見の祭りで、藩を挙げての一大行事でした。また、領民にとっても大きなお祭りで、近郷近在だけではなくて、ほかの地方からも多くの見物人が訪れていました。絵巻物などでは露店もたくさん出ていました。大変なにぎわいでした。また、よその地方から来た人たちの紀行文とか絵巻物にも野馬追が描かれています。そういうものから江戸時代の野馬追の様子を我々が知ることができます。

江戸時代の藩主相馬家と藩士の妙見参拝ですけれども、藩主の子供は、江戸屋敷から中村城に入るときに入部の記録ですとか元服の記録を見ますと、妙見参拝のことが記されていて、入部後初めての氏神妙見の参拝は明和2年7月9日の記録がありまして、いけにえとして神馬を献上し、一家の繁栄と領民の安寧を願ったというのが妙見に祈った目的です。こういうふうには国家の祈願をしていたわけですが、その管理をしていたのが相馬家の菩提寺である歓喜寺というお寺なんです。歓喜寺がそういう神社でのお祭り行事を司っていたわけです。

また、相馬家の家老の『熊川兵庫日記』というのがありますけれども、それによりますと、正月三が日には藩主が七時半、六時に妙光院、今の相馬中村神社に参拝したという記録があります。

藩士の記録には、『妙見社参服忌令』というのがありまして、神仏を詣でる際の死忌みについて書いたものがありまして、父母が亡くなった場合は喪に服する期間が1年と書かれていて、江戸時代には妙見のお祭り、妙見様のたたりを忌み嫌ったという神様です。震災の年には野馬追を絶やしてはいけないということで、家族を亡くした人も野馬追に出たんですけれども、そういう点は、江戸時代には死忌みに対して厳格でしたけれども、現代では、そういう忌みの観念がちょっと薄くなっているのかなという気がします。

それから、中村藩の江戸時代の歴史や地理について書かれた『奥相志』という本があるんですけども、そこにはいろんな神社仏閣のこともあるんですけども、残念ながら、本の刊行が終わる前に江戸時代が終わってしまって、領内全部の完全な記録ができなかったんです。

そこで現代になりますけれども、地元の民俗学者の岩崎敏夫先生がまとめた研究では、中村藩領内の妙見は44あると記録されています。今の南相馬市博物館と千葉市立郷土博物館が今から15年ほど前に共同で妙見信仰の展示をしたんですが、そのときに私が調べたときには、69カ所の妙見関係の神社やほこらを確認しました。例えば藩主関係ですと、さっきお話ししました城跡に祭られた妙見、あるいは中村城にありました妙見の神殿が養真殿として、今の浪江町に移されました。殿様が隠居した場所ですけども、そういう隠居所にも養真殿として妙見が祭られたりとか、あるいは、相馬家の家臣団が氏神として祭った場所、あるいは陣屋とか藩境、そういう藩政にかかわって祭られたもの。そういうものを合わせて69カ所でしたが、私がまだ十分把握してないものも、ほかにもまだあると思います。そういう点で、70カ所以上の妙見ゆかりの神社や祠が相馬地方にはあります。

この妙見なんですけど、ここにいろいろ書いていますけれども、小高神社、金性寺、養真殿。西原公館の妙見というのは、殿様が中之郷、今の南相馬市原町地区に来たときの館なんですけど、そちらにも妙見が祭られていたりとか、家臣団ゆかりの妙見ですけど、岡田氏という相馬の一族が祀った「しょはつ神社」とか「はじめ神社」と言われるところがあります。相馬地方には、「初発」と書いて「しょはつ」と呼んだり、「はじめ」と呼んだりする神社が多いんですけども、もともと江戸時代には妙見社でした。ほかに木幡氏が祀った氏神の妙見、さっきお話ししました飯館村、飯樋の妙見とか、境の妙見として飯館村二枚橋の初発神社があります。藩の南境としては大熊町熊町の妙見、南西の境には浪江町羽附、あるいは上津島の妙見があります。

一方、藩の北境なんですけど、中村は、北は伊達の領地と接してまして、相馬義胤と伊達政宗は合戦を繰り返したんですけど、実は相馬氏が境に祭った妙見というのははっきりわかっていません。ほかに戦勝地に祀られた妙見として、鹿島区横手にある妙見ですね。こちらは黒木氏との合戦に勝った記念に祀った妙見があります。

庶民の妙見としては、相馬市中村のお城の東にある初発神社、あるいは職人町に祭られた妙見の神社があります。

それから、日蓮宗の妙見信仰。先ほども九州の日蓮宗の妙見の話が出ましたけれども、

相馬にもあるんですが、直接千葉氏ゆかりの妙見ではないだろうと思います。大阪の能勢妙見の影響が、日本の日蓮宗の妙見信仰の1つとして相馬にも入っているのではないかなと思っています。そういう妙見をお祀りしている日蓮宗のお寺が相馬市の佛立寺というところにあります。

それから、弓の奉納も妙見のお祭りで、さっきも話が出ましたけれども、妙見に弓を奉納するというので、相馬では日置流印西派という弓術を使った弓組がいたんですが、その人たちは妙見のお祭りだけではないんですが、地元の神社の祭りや妙見の祭りに弓の奉納を現在も行っています。

明治以降の妙見信仰なんですが、明治政府が神仏分離令で、この妙見菩薩が神仏混淆とした、あるいは道教的な妙見信仰を神か仏が分けるように指示されまして、平田神道では、この神を天之御中主神として考えるようになりました。その結果、相馬の神社では、妙見が天之御中主神として祀られたり、名前も初発神社と名乗るようになりました。

このように、もともとは人間の運命を司ったり、運気を上げる星の神が中世の武士団では戦勝の神、軍神として祭られて、江戸時代には庶民の間にも広まった。近世には野馬追の馬の神様ということで、馬を扱っている農民や馬喰、そういった人たちにも信仰されました。

ちょっと急いでスライドをお見せします。こちらが江戸時代の野馬追図屏風です。

これが野馬懸をしている小高妙見の図ですが、このように神社の境内で馬を捕まえて神前に奉納するところです。

時間なので、ざっと流します。これが1日目の行事。騎馬武者がお城、あるいは各地の神社をスタートして、2日目には南相馬市原町地区の町中を行列します。お行列ですね。

そして、これが雲雀ヶ原祭場地。ここで甲冑競馬とか神旗争奪戦が行われます。これが甲冑競馬です。大変勇ましいスピード感のある行事です。これが神旗争奪戦。3つの妙見ゆかりの神社の旗を奪い合う行事で、馬のかわりに旗を奪い合います。

そして、これが野馬懸。馬を捕まえて神前に奉納します。塩をなめさせて清めて、たてがみに紙垂をつけて奉納します。

これが相馬地方の妙見信仰と、妙見信仰ゆかりのお祭りです。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

○司会 二本松様、ありがとうございました。

続きまして、いわて東山歴史文化振興会会長、佐藤育郎様から御講演いただきます。佐

藤様、どうぞよろしく願いいたします。

○佐藤育郎（いわて東山歴史文化振興会会長） 私は、スライドも何もございません。資料もめっちゃめっちゃな資料でございますので、どうぞ見ないでいただきたいと思います。

頭の切りかえというか、楽しい2つを申し上げたいと思いますが、その1つは、夕べ女妙見様に会いました。きのうの午後の話でございます。それは、島田行信さんという千葉市の元助役に紹介されて、現在、千葉神社の宮司のお母様、松井清子様にお会いしました。そのお姿を見て、さすがに元締め神社の宮司のお母様と感じました。白いものを上にかけて、媼のような背中をして、とてもいいお姿で、これぞ女妙見様と思いました。

そして、きょうは久しぶりに千葉城の本丸に上がりましたが、さすが本丸、これも大したことで空気もよく、少々日は照っておりましたが、とてもよかったです。そこに常胤公850年祭のときに建てられた碑があり、月星の御紋章がきちんとありました。それを私は紙に拓本、写し取りました。岩手に帰って、この御定紋を大切に伝えようと思いました。そして11時になって、濱名徳順導師様によって妙見信呪経という、ありがたい天台宗のお経を聞きました。そうして聞いているうちに常胤公のお声が聞こえてまいりました。本当でございます。千葉常胤公は、「おまえたち御苦勞だったな、これからもよろしくな、帰りはお土産買ってけよ」と、このようなお言葉を耳にいたしました。

さて、このフォーラムの本題でございますが、日本全国に妙見思想がどう伝わって、どうお祭りになっているかということでございますが、東北は御承知のとおり、源頼朝公28万の大軍、うけた平泉4代泰公は17万の軍勢で福島県阿津賀志山で勝敗が決まって、100年輝いた平泉は文治5年に露のごとくに滅んでしまいます。そして、その年にこそ、頼朝公御家人筆頭の葛西清重が奥州総奉行となり、並んで千葉常胤東海道將軍様が東北を治める、こうなります。その常胤公の六党ではございませんが、7、8番目の息子だろうと思いますが、東北に土着し、その名、千葉頼胤ということでございますが、以来、豊臣秀吉の代まで400年間、東北を治めると。そこで金色堂は残り、阿弥陀信仰も残っていたが、次の日から千葉の殿様のとおり妙見信仰に切りかえて土民、百姓に始まるわけではありません。恐らく50年も100年もたつて総州の妙見信仰が東北に土着してくる、こういうことだろうと思い、それと同時に、少しずつ蝦夷、アイヌから伝わる東北のお祭りに加えて妙見様の火祭が展開されていってと、こうなったことだろうと思います。仙台藩初代の政宗公も妙見様を信仰したことは間違いのない話でございます。

そこで、そういう気持ち、考えを東北に伝えるのが使命であると思ひまして、天正18年、豊臣秀吉の10万を超える軍勢に葛西・千葉一族5000～6000の軍勢で死を覚悟し、負けるのを最初からわかって軍議を開いて立ち向かうわけですが、その立ち向かう軍議の場面を再現したのが一関市東山町の唐梅館絵巻ということで17年間続いております。シナリオは、私が千葉神社と相馬野馬追をお手本にしてつくったお祭りで、人数は333人という武者行列でございます。とてもほかのお祭りにはかないませんが、それでも岩手にどうぞ来て見ていただきたい、このように思っております。東北にきちんとした相馬妙見様のような妙見祭はございませんが、それでも妙見信仰は今も生きております。一関市の小中学校の総合学習の中で千葉一族、千葉氏の誇りをきちんと伝えようと思っております。

時間終わりですか。——札が出ないようですから、最後に1つ、東北ではお馬さんがすくすく格好よく育つという、妙見様は馬の神様でもあるということがございます。

もう1つ、おまけのような伝説信仰がございます。妙見様を拝むと、目がはっきり、くっきりになると。本当かうそか、今晚から拝んでみてください。少々の白内障、緑内障は薄っこくなると思われますが、そのように妙見様はお目々の神様でもあるということも伝わっております。このこともいい話ですから、後世に残したいと思っております。

最後になりますが、福島県相馬中村の妙見神社の前で歌われる歌、そして相馬の方々が歌う「相馬二遍返し」という歌。この「相馬二遍返し」の歌にすばらしい一節がございます。「相馬恋しや お妙見様よ 離れまいとの つなぎ駒」です。200キロ離れた福島県から岩手のところまで「相馬二遍返し」がお祝いごとの歌として残っております。今、水1杯飲んで歌います。なかなかいい歌なので、声は悪くても手拍子をお願いしたいと思います。

(「相馬二遍返し」)

○佐藤育郎 疲れました。ありがとうございました。

○司会 佐藤様、ありがとうございました。

それでは、続きまして宮城県涌谷町教育委員会生涯学習課主事、二瓶雅司様から御講演いただきます。二瓶様、どうぞよろしくお願ひいたします。

○二瓶雅司（涌谷町教育委員会生涯学習課主事） 皆さん、こんにちは。宮城県涌谷町教育委員会の二瓶と申します。どうぞよろしくお願ひします。私は、パソコンを正面スライドに写しながら、それを読み上げる形で発表とかえさせていただきます。

今回の歴史文化フォーラムのテーマですが、「千葉氏と妙見祭礼」ということで、涌谷

町に、どんなものがあるかなと考えたときに、こちらの古式獅子舞を御紹介させていただきたいと思いました。お手元の資料では後ろのほうのページです。あと、オレンジ色のパンフレット等にも記載はありますが、基本的に発表はスライドのほうでさせていただきますので、前の画面をごらんになってください。

古式獅子舞、正面にある写真が一番の見せ場で本舞という形になります。2頭獅子の上に子供が1人ずつ乗り、それで舞う形が一番の見せ場となっております。獅子舞ですが、意味としては、悪いものをはらい、いいものを呼び込む、そういった芸能となっております。

ただ、この古式獅子舞の発表をさせていただく前に、涌谷町って、どこ？という方が多分大半の方だと思いますので、まずは涌谷町の話をしてください。

宮城県涌谷町ですが、皆さん、仙台市は御存じかと思いますが、中心部に仙台市がありまして、そこから車でも電車でも北へ約1時間程度の宮城県の北東部にある町となっております。大崎平野があり、米どころと知られていまして、その東端部になります。

町の中央には、東西に籠岳丘陵というのが走っていきまして、その中心に標高236メートルの籠岳山がそびえ立っていて、その周辺には田んぼが広がる、そういった農業中心の町となっております。

面積ですが、82.16平方キロメートル。きのうインターネットで調べたら、千葉で言うと、船橋市、あと銚子市よりかは一回り小さいような面積となっております。ただ、もちろん、それとは全然比べ物にならないぐらい人口は少なく、1万6,485人となっております。

町の特徴といたしましては、まず桜の名所でございます。下の写真にもありますが、涌谷伊達家の居館であります涌谷城跡、こちらのほう、ただいま城山公園となっているんですが、城山公園や下に走っている道路、河川敷上には桜が500本ほど植わっておりまして、4月には桜が埋め尽くすような場所となっております。

それともう1つ、日本初の産金地ということで、天平21年（749年）のことです。皆さん、奈良の東大寺の大仏様はよく御存じかと思うんですが、そちらをつくっているときに、表面に塗る金が足りないと聖武天皇が困っていた。そんなときに、この涌谷周辺から金が出て東大寺の大仏様が無事でき上がった歴史がございます。そういった形で歴史文化の香る町ということで、涌谷町の御紹介とさせていただきます。

次に千葉氏と涌谷のつながりということで、今回、生誕900年を迎えました千葉介常胤

の3男、武石三郎胤盛が1189年の奥州合戦、先ほども話がありました奥州藤原氏との戦いで功を立てまして、宇多や伊具、亶理の3郡を拝領しました。その地域がどこかというところ、1枚前のスライドに戻りますが、仙台市より南の沿岸部のほうです。宮城県の南部のあたりが亶理郡、この隣が伊具郡、そして宇多郡というのは福島県のほうです。こちらを拝領しました。その後、亶理という地名にちなんだ名前に改姓します。その後、当時、戦国時代ごろですかね。勢いのあった伊達家の傘下に加わり、そして天正19年（1591年）に伊達政宗が岩出山城に移るとともに、亶理氏は涌谷へ移封されたという形になっています。

その後、涌谷伊達家3代、定宗氏のときに伊達姓を名乗っていいぞということで姓を賜った形です。涌谷伊達家の中でも一番有名な方は4代目の伊達安芸宗重です。1660年代を中心に、仙台藩で起こったお家騒動がありました。伊達騒動とも呼ばれているんですが、今は寛文事件と呼んでいます。その際に仙台藩の行く先を案じ人力を尽くした結果、最終的に亡くなってしまっています。ただ、亡くなり方に忠義の死とか、すごい高い評価をいただきまして、その後、浄瑠璃や歌舞伎などの題材になっております。

下の写真、左手のほうが光明院ということで、涌谷にあるお寺ですが、武石胤盛の位牌寺となっております。左のほうが山門、奥のほうが本堂となっております。右手の本堂の中には、こういった形で武石胤盛の位牌が安置されているという形です。

もう1枚、千葉氏とのつながりということで、町内には妙見宮がございます。ただ、現在は神明社と呼んでいます。正式名称は神明社なんです。これは明治時代になって神仏分離令が發布された関係で、妙見宮を神明社と改めました。ただ、今も地域の方々には基本的には妙見宮とかお妙見様とって、神明社といっても伝わらない人のほうがほぼ大半だと思います。妙見宮は亶理家、後に涌谷伊達家が涌谷へ移封したときに一緒に亶理から移ってきました。

では、亶理の妙見宮はどこから来たのというと、やはり千葉のほうからと言われております。千葉の妙見七社のうち第三社を移してきた、そう言われています。

下の拝殿ですね。妙見宮、涌谷伊達家の氏神を祀っており、手前のほうが拝殿、奥のほうの本殿になっておるんですが、場所的には涌谷城跡から東へ500メートルぐらい行ったほどの小高い丘陵の上に鎮座しています。

その中、妙見神坐像ということで、御神体は一応鏡とは聞いているんですが、こういった高さ20センチにも満たないぐらい、ちょっと小さな神像がございます。後ろには家型の

厨子があるんですが、そちらには涌谷伊達家の家紋である月二九曜紋が施されている形です。

本題であります古式獅子舞の話に移っていきます。胴に涌谷伊達家の家紋である、先ほど御紹介した、月二九曜紋が施された2頭の獅子と狛犬が稚児にあやされ、緩やかなおはやしに乗って舞います。

この右下の写真が大体の構成なんですが、奥のほうに2頭の獅子と狛犬がいて、それに相對するように稚児がいます。そして、左手には緩やかなおはやしを鳴らす子供たちがいます。それが県内では珍しい形なので町の指定文化財となっております。現在では古式獅子舞保存会がありまして、66名ぐらいの人数がいるんですが、その中に保護者もまじってはいるので、実際に演舞にかかわるのは30名から40名ぐらいとなっております。

古式獅子舞の由来なんですが、一応、言い伝えや文献等を総合すると、獅子舞は天文21年（1552年）に涌谷伊達家の初代当主、亙理元宗が京都へ遊学したとき、京都の愛宕神社で演舞されている獅子舞を見て、それに感銘を受け、一緒に持ち帰ったと言われていいます。そういった口伝とかがありながら、実際に物として残っている最古の記録は文久2年（1862年）、江戸時代も終わり頃に妙見宮へ奉納された絵馬となっております。その絵馬がこの左下のものです。ちょっと劣化が激しく、何とかしたいとは考えているんですが、こういった状況を見かねて、町内にいる古老が模写したものがこういった形です。先ほど話をしましたが、獅子と狛犬がいるんですが、文久2年、江戸時代の終わりの獅子と狛犬には涌谷伊達家の家紋は使われておりません。ただ、今と変わらずに白い点々が残っている形。また、おはやしなんかも変わりません。あと、お神輿も古式獅子舞には重要な要素となっており、それも変わっておらず、ただ、稚児が鼓を持っていたりするんですが、今は後ほど御紹介するように幣束と軍配を持っています。

獅子と狛犬ということで、私も初めて獅子舞と出会ったときは、あっ、獅子が2頭いるんだなと思ったんですが、こちらの2人立ちの獅子、右手の赤い頭のほうが獅子で、黒い頭のほうが狛犬になっています。見分け方としては、黒いほうの頭の上に黄色の角みたいなものが乗っていて、そちらのほうが狛犬という形です。

こちらの正面、胴の黒い幕には涌谷伊達家の家紋、月二九曜紋が施されています。ただ、昨日、この後パネルディスカッションでコーディネーターを務めていただく濱名先生からは、こういったものは千葉では十曜紋と呼ぶという話をお聞きしました。そういった地域性の違いがあるのかなと思っていました。この獅子なんですが、中に入るのは大体30

代から50代ぐらいの男性になっています。獅子頭を持ち、カタカタと頭を上下に震わせ、横に舞いながら稚児に迫っていく形になっていきます。

稚児とはやしということで、まず、左手の稚児のほう。稚児といっても、何だと思われられるかもしれないんですが、大体3歳から小学校中学年ぐらいまでの子供のことで。青い服は男の子、赤い服は女の子、こういった衣装を着ます。これらの稚児たちが左手に幣束、白い切り紙を持ち、右手に軍配を持って、先ほど迫ってくる獅子をあやしていく舞いになっています。

右手、その横でおはやしをしているのは稚児を卒業した子供たちであったり、20代ぐらいまでの大人が太鼓や笛を鳴らし、獅子舞を盛り上げている形です。

演舞の様子ですが、踊りの内容としては、まず、道笛で行進してはやし笛で踊り始めます。眠りということで、獅子が迫ってくる、稚児がそれをあやすみたいな形です。そして、獅子は眠るんです。先ほど郡上市の齋藤会長の発表で、獅子がぺたっと地面に座っている形がありましたが、ああいった形でこちらのほうも眠り、今度は起こし、そして子供があやしをする、最後に本舞の順になっていく形です。

演舞の様子、これが本舞なんですけど、獅子の上に稚児を乗せて舞います。この獅子あやしは、文殊菩薩の「文殊よく百獣の王を鎮める」という意味をあらわしたものとされ、古き時代の神仏混淆の名残をとどめていると言われていています。現在、町民の健康や商売繁盛、子供たちの健やかな健康を願って演舞しています。

演舞の時期ですが、今お話しさせてもらいました妙見宮では9月の第1週の土曜日、また、城山公園では桜の咲く時期に桜まつりがありまして、4月の第4週の日曜日。その他、いろんな神社であったり、イベントであったり、そういった機会に出演しておる次第です。

今日のテーマですが、「千葉氏と妙見祭礼」ということで、正直ふわっとしたことまでしか言えないんですが、獅子舞は戦国時代に伝わった可能性があり、少なくとも江戸時代の終わりごろから受け継がれたものです。当初はもしかしたら権威づけ的な意味合いがあったかもしれませんが、今は大衆的なものになっていると思います。

そして、祭礼を行うにはやはりお金も必要ですから、そういった関係もあって休会したり、また再開したり、そういったことを繰り返して今に受け継がれています。記録や古老の話では、獅子舞は町内の川原町という、とある地域ですね。これは妙見宮から約1キロぐらいは離れているんですが、そちらに伝わってきたものと言われていています。そして、先

ほど御紹介した絵馬が妙見宮に奉納されていることから、獅子舞と妙見宮は古くから深いつながりがあったとは考えています。

そして現在ですが、獅子舞が一番意欲的に取り組んでいる演舞は妙見宮への奉納（演舞）なことから、妙見宮ひいては涌谷伊達家への思いが伝わってくるようです。

時間もそろそろなので、以上となります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 二瓶様、ありがとうございました。

それでは、ここで予定どおり17時5分までの休憩に入らせていただきます。次は17時5分からパネルディスカッションをいたしますので、それまでに御着席をお願いいたします。

（休 憩）

○司会 それではお時間になりましたので、これからパネルディスカッションを開催いたします。

コーディネーターは千葉氏顕正会副会長、濱名徳順でございます。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。

○濱名徳順（千葉氏顕正会副会長） それでは、早速ディスカッションを始めていきたいと思います。私、これで3年連続のコーディネーターということでございまして、職業は僧侶、副業がコーディネーターということになってしまっておりまして、専門は仏教美術なんですけれども、なかなかそっちのほうのテーマが回ってきませんで、かわりにコーディネーターをすることになってしまっていて、まことに当惑しておるわけなんです、いずれにせよ、既に長時間、皆さんもお疲れのこととは思いますが、これから30分ほどディスカッションして、さらに内容を深めていきたい、このように考えております。

まず最初に、先ほど日暮さんに中世の千葉氏の妙見祭礼をお話しいただいたんですが、最後ではしられたところがございましたので、そこをまず一度お聞きしてからスタートしていきたいと考えているんですが、夜儀ということで、夜行われるのが平安以来、古代以来の妙見の祭礼であろうかなと。これは北辰星、北斗星の妙見菩薩は尊格化で、昼間だと星は出ていませんから、やはり星に我々の存在を訴えるという祭礼でございまして、夜儀礼を行うというのが本来のあり方なのかなと思うんですけれども、中世、千葉神社の妙見祭礼に夜儀のことが書かれていると思いますので、最初、そのことについて日暮さんに一言お話をいただければと思います。

○日暮冬樹 先ほどは済みません。算数ができないもので、きのうまでは原稿が足りない

と書いていたが、計算が全然違っていました。

今のお話ですけれども、7ページを見てください。(Ⅲ) 正月修正の祭礼として、史料12、13を挙げてあります。「正月三日の夜の修正」、「三夜の御鈴」とか言ったりするのですけれども、夜に妙見の御前に集まって行う祭礼の史料になります。

史料12を見ていただくと、「正月3日の夜の修正とハ、千文字・葉文字□□二字を題として、よろつことの葉を続けて、年中の事を願ハし給ひて、妙見の御前にて慚愧慚悔をし、年中の悪念を払ひ祭ることの御鈴なり、是一門及国内繁昌の御祈念也」と書かれています。

史料13には、そのやり方がもう少し詳しく書いてあるのですけれども、正月の3日の夜に集まりまして、千葉氏の当主が自分のよろずことの葉を続けて、その1年の自分の慚愧慚悔を妙見の御前にして、鈴を鳴らして悪念をはらう。そのことによって一門及び国内繁昌の祈念が行われていたと言われております。これが、ほかの史料、『千学集抜粹』の記述を見てもかなり古い時代から行われて、場所も陣屋でやったり、妙見の仮屋でやったり、また金剛授寺の座主の客殿でやったり、時代によって転々としているようなことがわかります。ですから、やり方等も、史料13のやり方が中世を通じて全域でやられているというわけではないのですけれども、基本的に妙見の御前で告白することによって、その邪気を鈴ではらうという妙見の祭礼がかなり古い時代から後々まで行われていたことがわかる例だと思っています。

○濱名徳順 ありがとうございます。要は当主が妙見様の前で汚れをはらうような、人間ですから、いろんなことをやってしまうわけですけれども、そういうことを慚愧、悔過をする。平安時代ですと、悔過法要というのが非常にはやっていたわけですけれども、申し述べることによって、それをはらっていくと。当主がそういうまつりごとを行ったという妙見の祭事が千葉神社で中世行われていたと。これはかなり古い時期、それこそ軍神(いくさがみ)になる前からの妙見の信仰といいますか、祭礼というか、そういうものを受け継いだものなのではないのかなと考えられるところだと思うんです。

小川さん、現在の千葉神社の祭礼では、夜、そういった慚悔するという系統の祭事は行われているのでしょうか。

○小川智之 慚悔というわけではないですけれども、一言妙見と千葉神社は言われておりますが、ちょうど夜の宮入りの最後に御霊遷しという行事が行われます。夜8時ぐらいなんですけれども、さっき言った昇殿勇めというのを行って、終わった後、御分霊をお返し

するんですけれども、電気をぱっと消して、そのときにお願いをすると願い事がかなうという、これが一言妙見の由来になっているということで、この時期に知っている方は、皆さん、そこに集まってきてお祈りをする。そこは慚愧をしているかどうかわかりませんが、皆さん、最近は慚愧することよりも、何かお願い事をかなえるという、ちょっと俗っぽくなってしまっているような感じになっているのではないかなと思います。

○濱名徳順 古代の妙見祭礼の記録などを見ても、夜、灯を献ずるということで、献灯というような儀式が妙見祭礼の中心となっていたことがわかるわけなんです、夜、灯を灯すみたいな、そういうことをやられている地域というのはございますでしょうか。相馬なんか、いかがですか。

○二本松文雄 相馬は、相馬野馬追の3日あるんですが、その中日の夜に小高郷、今の南相馬市小高区では、騎馬武者が一旦原町のお祭りの場から小高に戻ってきたときに篝火をたいてお迎えをしているんです。さらに花火大会も一緒にやっているんですけれども、ただ、それは古い祭りの要素を引き継いでいるというわけではなくて、近代になってから観光行事として始まったようです。

○濱名徳順 相馬の場合は御当主も残っていらっしゃるわけですね。ほかの地域ですと、殿様は少なくともその場にはいらっしゃらないわけでしょう。先ほどの夜の中世の千葉の祭礼というのは、当主がまさに地域のために汚れをはらうというような、当主がいなくなっちゃったら、そういうことをやらなくなるというのは、これはまだわかるんですけれども、相馬の場合は、例えば江戸期とかには、まだまだそういうのは残っていた可能性があるんじゃないかなと、ちらっと思っちゃったりしたんですけれどもね。

○二本松文雄 相馬地方では、夜の行事というのは、近年になってから、野馬追の3つの神社のお神輿を公園に集めて、騎馬武者が談義する軍者会という行事がありますけれども、それも近年の観光行事の1つで、古来の夜の儀式というわけではないです。ですから、相馬、あるいは野馬追の行事としては、夜の行事というのはちょっと思い浮かばないです。

○濱名徳順 ありがとうございます。郡上はいかがでしょう。夜の儀式というのは、妙見神社様には何か伝承しているようなことというのはございますでしょうか。

○齋藤武生 特にございません。どこでも12月31日の夜は大晦日の晩、また新年を祝うということで神事的なことはあるかもわかりませんが、除夜31日に神主さんが来て祝詞をあげて新年を迎えると。元旦の零時ということは夜中ですね。ということですが、

特にこれが今言う献灯ということなのかどうかはちょっとわかりません。

○濱名徳順 献灯の儀式が非常に盛んに行われていたのは平安の記録に残ってしまして、何かなというと、妙見というのは星ですから、天にあって、衆生の行いがよく見えるんですよね。だから、妙見と言うんだと思うんですけれども、よく見ていて、そして行いによって衆生の運命を左右していくと。よいことをやっているると寿命を長くする、悪いことをやっているると罰を与えるみたいな、そういう存在でございました。ですから、ある時期に集まって、私どもはここで一生懸命やっていますよ、あなたのことを尊敬していますよということで、星に見せるために献灯するということが献灯のもとではないのかなと思うんです。やっぱり夜儀が残らないのかな。近藤先生のお話にもありました、秩父の妙見の祭礼は夜祭りということで、あのあたりが一番古いスタイルなのかなと思うんですけれども、ほかの地域で夜の儀礼とか、残っていらっしゃるところはございますでしょうか。皆さん、なさそうな顔を……。

○観覧者 この席におりまして、今お話が出ておりましたので、お祭りごとはこの宮でもそうですが、宵宮とって、宵祭りからお祭りは始まります。ですから、全てのお祭り事をお正月にしましても、その前の夜から始まるということは今でもやっております。それは、この千葉神社の場合においても妙見様でございますので、16日の前の15日の夜には志のある人たちが集まって、そして潮垢離に行っておりました、16日のゴシニューのトウヤに御奉仕するということはつながっております。確かに灯の祭りというのは稲毛の浅間様なんかでもやっておりますけれども、やっぱりお宮ごと、神様事は夜から始まるというのは変わらないことでやっております。皆様、それだけは御承知おきいただきたいと思えます。

○濱名徳順 わかりました。やはり何らかの形で名残が残っている、そんなところなのかなと思います。

それからもう1つ、中世の千葉氏の祭礼の中で元服式のことをございましたけれども、そちらも発表のときにはお話しいただけませんでしたので、そこも日暮さんから一言お話しいただけますでしょうか。

○日暮冬樹 8ページをごらんください。史料14として元服の史料を載せております。7行目から元服の儀式—簡単にですけれども—をどのようにおこなったかというのはこちらに書かれております。

下のほうからですけれども、「此例に随ひ、住寺より御字を申請て、御神前にてくじをと

らせられ、御宇を定め給ひて御元服あらせらる、此時寺家秘訣毘沙門天を妙見菩薩の御代りに新介三度まで押し給ふ也」ということで、先ほども申しましたとおり、千葉氏の内紛によって妙見は金剛授寺に移るのですけれども、それ以前のお話ということになります。

妙見が千葉の館のほうにあるのですけれども、これを見ますと、金剛授寺のほうで元服の儀式を行っているということがわかります。その際、住寺から名前の1字を申し請いて、御神前で鬮をとって名前を決めたと。その名前が決まると、妙見のかわりに毘沙門天に押し給わったということが書いてあります。

ですから、妙見の御加護で元服することが大事であったということが言われているわけなんですけれども、一方では、妙見の前だけではなく、妙見のいない金剛授寺に赴いて毘沙門天に押し奉るということも、この史料を読むと重要であると。ですから、妙見ばかりじゃなくて、金剛授寺の毘沙門天を拝むこともかなり無視できない元服の要素だったのではないかということがこの史料から言えるのではないかと思います。

○濱名徳順 千葉氏は代々、ある時期から、常胤以降は「胤」の字を通字にするわけですので、住寺より鬮を引くとなると、その上のところを、いろんな字があって、そこから鬮を引いて、じゃ、私は何胤にしようとして妙見様から名前も頂戴し、そして妙見様に認められて元服する、頭領になるという惣領の権威づけのような祭礼がずっと行われていたということだと思んですが、しかし、ある時期からは、北条氏から偏諱などを受けていますよね。そのときはどうしたのかなと思ったりするんですけれども、いずれにせよ、決まっても、妙見様の神前で鬮を引いて、妙見様に惣領であるということが認められて、そういった祭事を行っていたというのが、いろんな祭事がある中でも、こういった重要なポイントがあったんじゃないかなと。そういう中世の祭礼から今日の御発表いただいた祭礼へと、いろいろな形で変化も遂げているということがあるのかもしれない。

それから、小城の祇園祭りについてでございますけれども、こちらが実際に記録の上でといいますか、どのぐらいまでさかのぼっていくことができるものなのでしょうか。本当に胤貞の時代までさかのぼれるのか。

○古庄秀樹 小城の古庄でございます。祇園会のことでございますけれども、由来によると千葉胤貞公が始めたと言われておりまして、ことしで702年ということになります。しかし、実際、どこまで一次史料で確認できるかといいますと、16世紀、千葉胤繁という方がおりますが、その方の古文書の中に祇園社という言葉が出てまいります。そのころには間違いなく祇園社、須賀神社はあったんでしょうし、そこに付随する祭礼としても始めら

れていたのではないかということを考えております。ただ、伝播の形としては、肥前千葉氏は中国山口の大内という大名とつながりがありましたので、京都、山口、小城というネットワークというか、そういうものを通じて小城に祇園会が入ってきたのではないかと、それが今のところの定説でございます。

○濱名徳順 千葉氏が導入したものであるけれども、関東のものではなくて、京から導入したんだという1つのストーリーがあるわけですね。そういう点では涌谷の獅子舞も似たようなストーリーを持っているのではないかなと思うんですが、いかがでございましょうか。

○二瓶雅司 涌谷のほう、先ほど話もさせていただきましたが、京都の愛宕神社で演舞されていた獅子舞を持ち帰ったと言われていますが、京都のどなたと交流があったか、そういったところまではちょっとわからない状態ではあります。

○濱名徳順 実際にそうかどうかは別として、千葉介というか、武石氏や千葉氏が中央から、また別の新しい文化を地方に持ち込む存在というような、そういう1つのイメージみたいなものが形成されていたといえますか、例えば円通寺様ですか。宗胤が中興して、あいつ偉大な禅寺になったとか、そういう千葉氏が必ずしも関東や下総からではなく、新たな文化をそれぞれの地方に持ち込んでいくというか、そういう存在として見られているというようなイメージも祭礼の中から読み取っていくことができるのかなと、今回ちらっと思ったりもしたんです。

それから、東山についてでございますけれども、大体、旧千葉氏所領といいますと、必ず妙見社が勧請されていて妙見信仰が展開しているというのが実際のところでございますが、東山のほうは現在はどういった状況なのかなということでお話しいただきたいんです。

○佐藤育郎 一関市東山町ということでございますが、我々一関市は千葉一族、東北に光るものと光る土地というところ——ここに涌谷町の町長さんがおいでになっておりますが、涌谷町の千葉氏というのは、東北ではあがめる相馬の妙見様同様にという感覚が残っております。そういう中で、お祭りとしてはっきりしたものはございませませんが、正月とか、お供えするお餅に9つ丸くしたのを九曜の星のように見立てて神棚にあげると。月の星で形どった餅を神前とか神棚にというのが今も残っております。こんなところでございます。

○濱名徳順 妙見社というのは、現在は……。

○佐藤育郎 妙見社と称するのは、一関から30キロぐらい北の奥州市水沢というところに、天台宗の古刹でございますが、妙見山黒石寺です。山号が妙見山です。ここに妙見堂があり、立派な妙見菩薩様が飾られております。ここに来るため、藤波洋香住職様にお願い申し上げて、この妙見菩薩を拝んでから千葉に参りました。

○濱名徳順 像容を見ると、明らかに千葉妙見のスタイルなんですけど、黒石寺の妙見菩薩が千葉氏と関係しているという伝承はないようですよ。いかがなんでしょうか。

○佐藤育郎 ないと言うと寂しくなるので、あったのじゃないかなということで御了承をということでございます。

○濱名徳順 わかりました。もう時間も残りわずかになってしまったんですが、最後に千葉氏の祭礼と馬ですよ。中世の千葉の祭礼の記録を見ると、馬の奉納だとか、そういうことが書かれておりますし、それから古い記録によりますと、千葉神社の祭礼で300匹の馬の早駆けが行われていたと。これは現在の野馬追にも流れが繋がっているものであろうと私は思うんですけども、妙見様と馬の結びつきというのは、日暮さん、いかがでございましょう。

○日暮冬樹 妙見と馬なんですけれども、ただ、金剛授寺の古い時代の儀式、惣代七社大明神とか、そういう記録を見ると、馬というものが余り出てこないで、おおよそですけれども、『千学集抄』の金剛授寺の記録で馬が出てくるのは、大体、戦国時代、中世後期に多くなっていると思います。『東路のつと』で書かれている、今お話のあった早駆けも戦国時代のお話なので、結構新しい時代に千葉という土地、また軍神という、妙見の神という性格もあって、新しくついてきた性格ではないかなと個人的にはちょっと思うんです。

○濱名徳順 ありがとうございます。時間が来てしまいました。これからそれぞれの地方に新幹線で帰られる方の電車の時間を考えると、これ以上延ばすとだめだということだそうでございますので、議論、まだ不十分ではございますけれども、きょうの歴史文化フォーラムは以上で終わりにさせていただきたいと思います。千葉氏の妙見信仰について、もっと詳しく知りたいという方がいらっしゃいましたら、『千葉一族入門事典』というのがおとしサミット実行委員会から発行されておまして、そこに「千葉氏の信仰」という論文が載っているんですよ。誰が書いたかはよくわからないんですけども、これに結構まとまっているような気もいたしましたので、この辺を手にとって勉強していただくと、さらにその辺がわかってくるのではないかなと。重版ロングセラーと書いてありま

す。

ということでございますので、きょうのディスカッションは以上で終わりにさせていただきたいと思います。(拍手)

○司会 皆様、御講演、また活発な御議論ありがとうございました。

以上をもちまして、歴史文化フォーラムを終了いたします。御来場の皆様、ステージの皆様にも1度拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、ステージの皆様、どうぞ御降壇ください。

以上をもちまして、千葉常胤生誕900年記念講演・歴史文化フォーラムを終了いたします。御来場の皆様、長時間にわたり御清聴いただきまして、大変ありがとうございました。お気をつけてお帰りくださいませ。